

第2章

北九州市の観光の現状と課題

1 北九州市の観光の現状と強み

(1) 北九州市の成り立ちと都市としての魅力(歴史・文化の強み)

北九州市は、江戸時代には小倉藩の城下町、長崎街道の起点として、明治時代以降は国際貿易港の門司港や、石炭積出港として発展した若松南海岸(若松バンド)など、個性と活気のある街並みを生み出し、多くの人々が行き交う交流都市としても繁栄してきました。

また、蓄積された交流の歴史、工業都市としての歴史は、「暮らす人」「訪れる人」がともに楽しむ伝統的な祭り、ぬかみそ炊きや焼うどん^{※3}などの郷土料理といった豊かな食文化や江戸時代から昭和初期にかけて全国で栄えた伝統織物である小倉織^{※4}を生み出しました。

さらに、皿倉山からの夜景や工場夜景など「日本新三大夜景都市」に認定されたバラエティ豊かな夜景は、「暮らす人」「訪れる人」を魅了し続けています。



わっしょい百万夏まつり



若戸大橋ライトアップ

(2) 北九州市の海・山の魅力(自然や景観の美しさ)

北九州市は都市としての利便性もありながら、関門海峡や日本三大カルストの一つで、国指定天然記念物でもある平尾台などの海と山や、市内最大の公園、響灘緑地(グリーンパーク)など自然に触れあえる場所が多くあることも大きな魅力の一つです。

豊かな海は「豊前海一粒かき」や「関門海峡たこ」「関門のふぐ」を、郊外に広がる美しい大地は「合馬のたけのこ」や「若松水切りトマト」といった新鮮な食材を生み出し、人々をもてなします。さらに、若松北海岸や河内藤園を含む河内貯水池周辺などの美しい自然景観は、多くの「暮らす人」「訪れる人」にとって癒しとくつろぎの場となっています。



若松北海岸 遠見ヶ鼻(妙見崎灯台)



平尾台グランピング

※3 「北九州の糠の食文化」と「小倉焼うどん」は文化庁認定「100年フード(地域で世代を超えて受け継がれてきた食文化を、100年続く食文化として継承していくことを目指す)」に選定された。

※4 江戸初期から袴や帯、羽織として用いられており、明治時代以降は男子の学生服などにも用いられ、昭和初期に一度途絶えたものの、その後復元・再生された。県知事指定特産工芸品。

(3) 北九州市の「学びのまち」としての魅力(産業観光、環境教育の充実)

建築家磯崎新氏の設計としても知られる「北九州市立美術館」、西日本最大級の規模を誇る「いのちのたび博物館」をはじめ、「安川電機みらい館」「TOTOミュージアム」などの企業ミュージアム、環境に関する展示・体験施設である「環境ミュージアム」など、公設・民設を問わず、幅広い分野にわたり数多くのミュージアムが立地していることも、北九州市の強みの一つです。

このようなミュージアム群は、楽しく体験し学ぶ場として、また環境教育の場としても産業観光や修学旅行などで多くの人々を集めています。



北九州市立美術館



TOTOミュージアム

(4) 北九州市の市場・立地の優位性

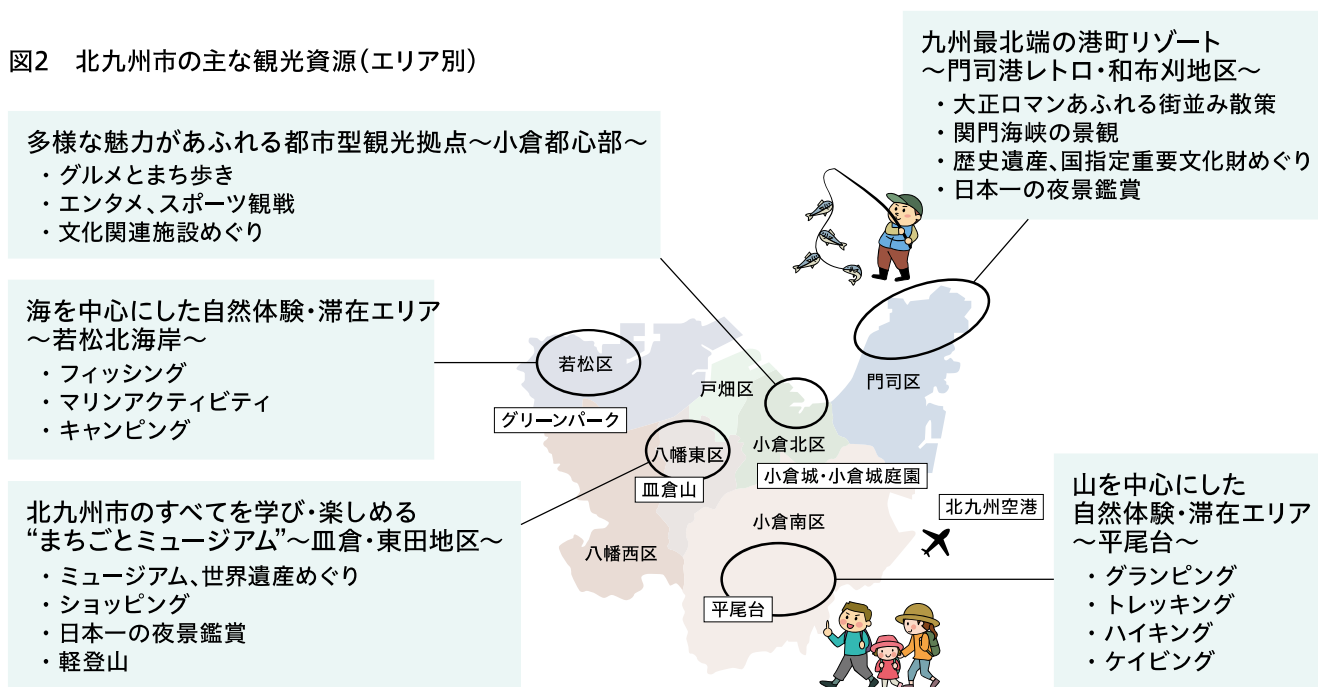
北九州市は、人口約140万人の北九州都市圏域に加え、約260万人の福岡都市圏など、恵まれたマイクロツーリズム市場を有しています。また、出張やMICEでの来訪も盛んで、宿泊客のうちビジネス目的の割合が約7割と高いことも、北九州市の特徴の一つです。

また、九州・中国四国で唯一の24時間空港である北九州空港、本州と九州を結ぶ鉄道の玄関口であるJR小倉駅、西日本最大級のフェリー基地である新門司港など、国内外とつながる公共交通の結節点でもあります。こうした利便性を活かし、北九州市とは異なる魅力を持つ近隣の大分県、山口県などとの連携を進めることにより、北九州市を起点にした広域周遊観光の展開も期待できます。

(5) 北九州市全域に広がる魅力

北九州市は、歴史・文化、食、ショッピングなどが楽しめる都市型観光の拠点であるとともに、海と山に囲まれ、豊かな自然に恵まれるなど体験・滞在型のコンテンツも揃っており、市全域に様々な楽しみ方ができる観光資源が広がっています。

図2 北九州市の主な観光資源(エリア別)



2 コロナ禍を経た社会環境・観光の変化

(1) コロナ禍で生まれた新たな観光のかたち

コロナ禍によって移動や交流が制限される中、観光・交流を取り巻く環境も大きく変化しました。このような変化は一時的なものではなく、コロナ収束後も続くと言われています。

ア 訪問先・同行者の変化

コロナ禍においては、混雑する場所・時期の回避とともに、マイクロツーリズムの割合が増加しました。また、感染リスクを避けるため、コロナ禍以前から進んでいた団体旅行の減少が加速し、家族や親しい人との少人数の旅行が拡大しました。

イ 新たな観光・交流市場の出現

移動の制限や安全・安心な旅を求める中で、ワーケーション^{※5}や、親しみのある地域に何度も訪れる旅(第2のふるさと)、自然に親しみ、様々なアクティビティや地域の文化・交流を楽しむアドベンチャーツーリズムといった、「コト消費に対応した」新たな観光・交流市場が生まれました。

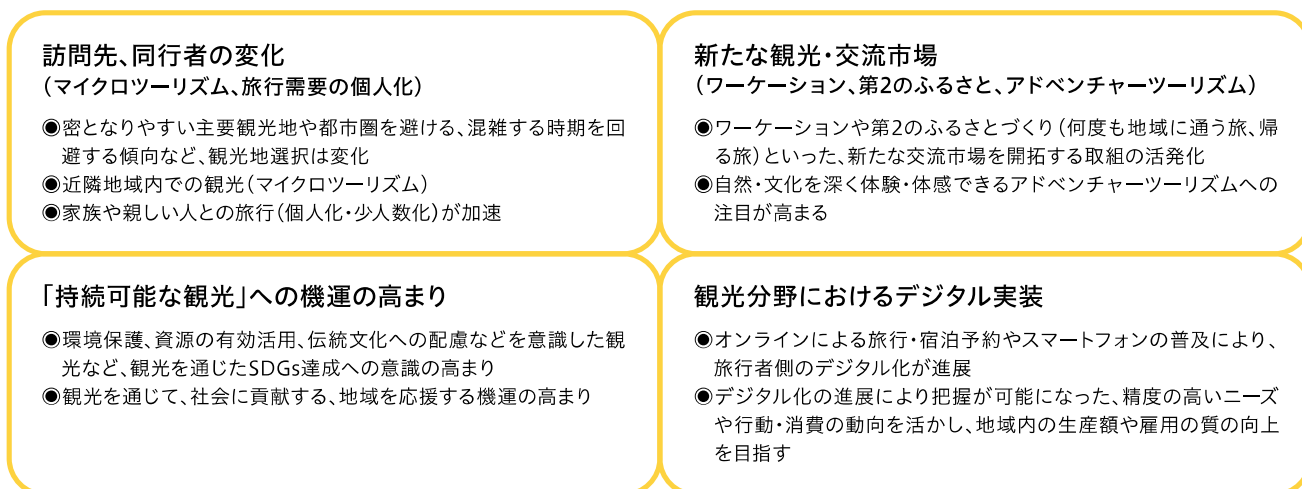
ウ 「持続可能な観光」への機運の高まり

世界的にSDGsへの関心が高まる中、旅先での文化体験や地場の産品を積極的に消費・購入したり、公共交通の利用などで二酸化炭素の排出に配慮したりすることなど、観光における持続可能性の機運が高まっています。

エ 観光分野におけるデジタル実装

コロナ禍で、オンラインによる旅行予約や非接触で安心なキャッシュレス決済が進みました。また、デジタル化の推進によって、観光客の行動・消費傾向を把握し、観光による地域経済への効果を高める仕組みづくりが進んでいます。

図3 コロナ禍で生まれた新たな観光のかたち



資料:観光庁「観光白書2021」より

※5 ワーケーション…テレワークなどを活用し、Work(仕事)とVacation(休暇)を組み合わせ、普段とは異なる場所で仕事をしつつ、自分の時間も過ごすこと。

(2) 日本国内の観光の状況

令和2(2020)年以降、世界的に拡大した新型コロナウイルス感染症の影響により、各国や地域での水際対策の強化や移動の制限などが行われ、訪日外国人旅行者数を大きく減少させました。また、国内においても旅行控えや外出自粛などの影響で国内延べ旅行者数は、令和2(2020)年は前年と比べほぼ半減、令和3(2021)年はさらにそれを下回るなど、厳しい状況が続きました。

しかし、令和4(2022)年は、国などによる国内旅行の需要喚起策や、水際対策の緩和による国境をまたぐ往来の復活などもあり、国内・インバウンドの観光需要の回復への期待が高まっています。また、令和7(2025)年の大阪・関西万博の開催などを契機とした観光立国の復活も期待されます。

図4 訪日外国人旅行者数の推移

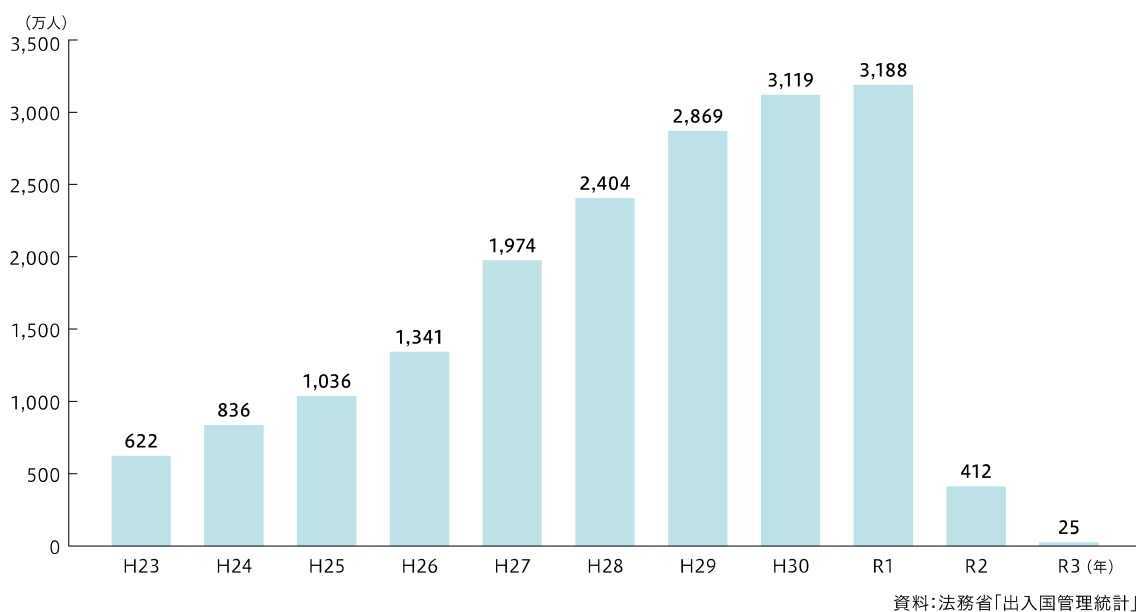
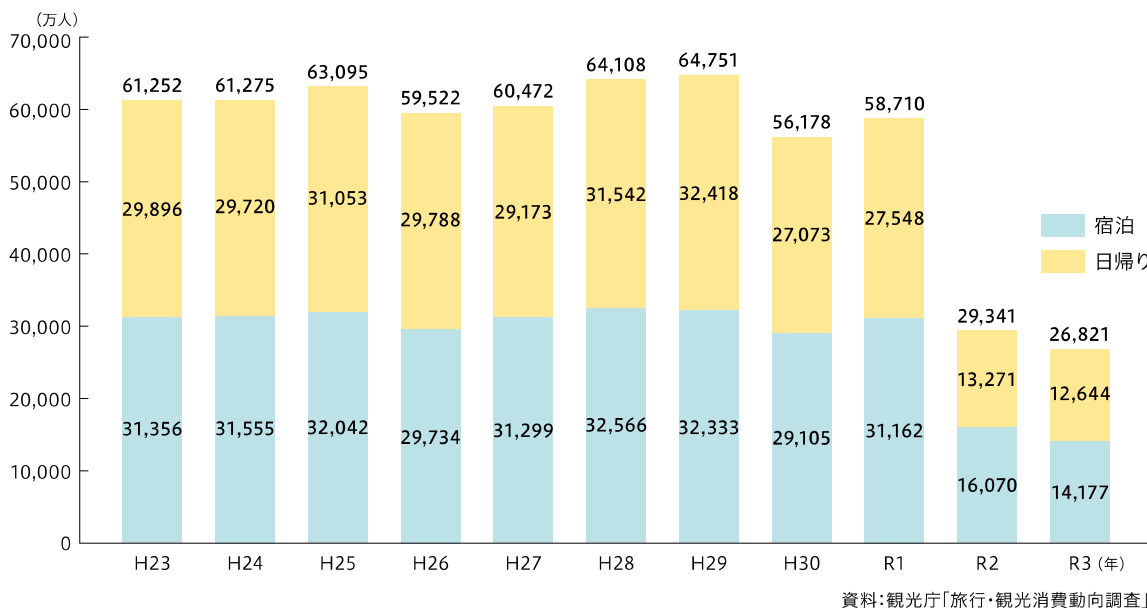


図5 日本人国内宿泊旅行、国内日帰り旅行(延べ人数)の推移

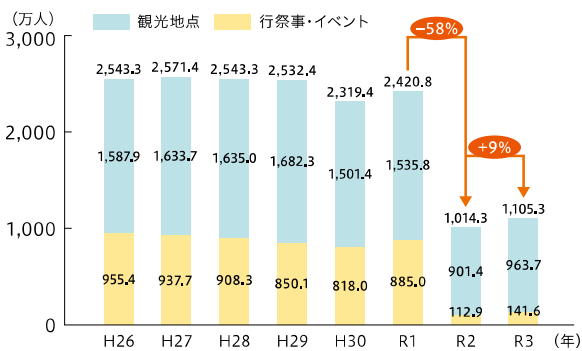


(3) 北九州市の観光の状況

北九州市の観光客数(延べ人数)は、令和2(2020)年初頭から新型コロナウイルス感染症の拡大により、同年は前年比60%近い減少となりました。令和3(2021)年もその影響は継続していましたが、底堅いビジネス需要に加え、「北九州魅力満喫キャンペーン」をはじめとする北九州市独自の支援策などにより、わずかながら回復の兆しが見えました。

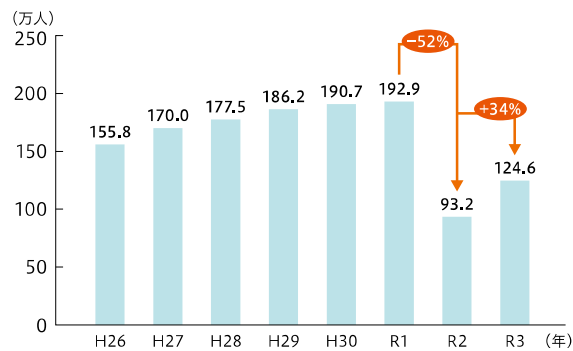
分野別に見ると、修学旅行の回復が顕著となっています。北九州市の魅力を活かし、SDGs修学旅行など教育分野の旅行需要を取り込めた結果、修学旅行生数は令和3(2021)年で対前年123%増加となっています。

図6 北九州市の観光客数(延べ人数)の推移



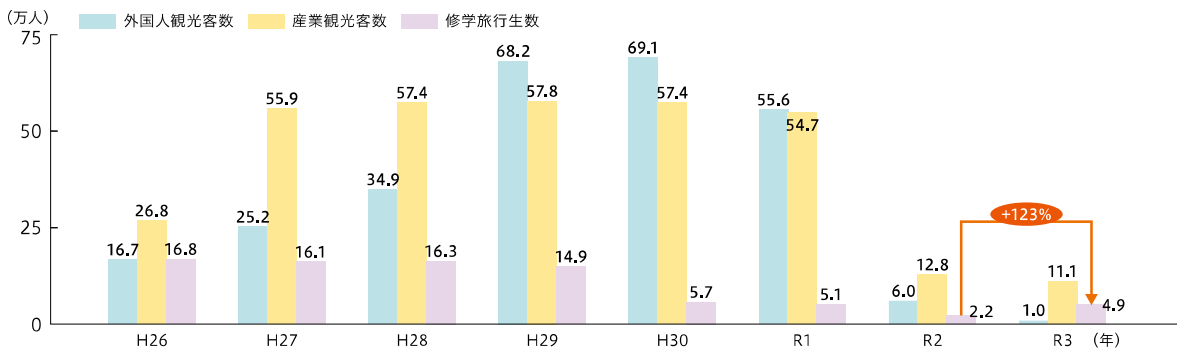
資料:北九州市観光動態調査

図7 宿泊観光客数(実人数)の推移



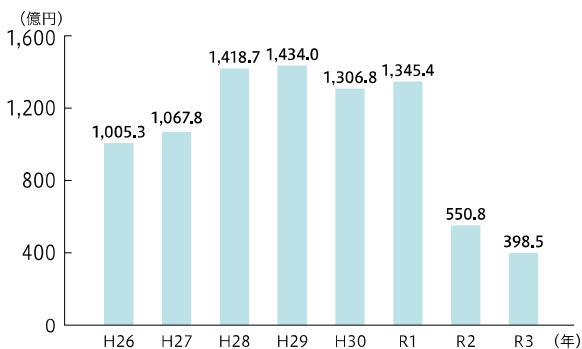
資料:北九州市観光動態調査

図8 分野別観光客数の推移



資料:北九州市観光動態調査

図9 観光消費額の推移



資料:北九州市観光動態調査